

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K04	氏名	八木澤 圭
研究主題 —副主題—	基礎学力の向上を図るための ICT 活用の継続に関する研究		
所属校	渋谷区立猿樂小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>昨今の教育現場においては、学習指導要領の改訂で重視されている「生きる力」と「確かな学力」を身に付けさせるためにどのような実践をしていくかについて、多く議論されている。</p> <p>教育基本法（2006 改正）によると「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるもの」（第 5 条 2 項）となっている。</p> <p>学校教育法（2007 改正）では「小学校は、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施すことを目的とする。」（第 29 条）とあり、その実現のために「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させる」（第 30 条 2 項）と記載されている。</p> <p>学習指導要領（2008、文部科学省）では、先述の改正教育基本法等で示された教育理念を踏まえ、現在の子供たちへの課題の対応の視点から「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を基盤とした「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」及び「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」が重要であると記載されている。</p> <p>私は、日常の授業の中に実物投影機などの ICT を取り入れた分かりやすい授業をしていきたいと考え、実践してきた。</p> <p>そこで、私は ICT を取り入れた授業を継続して実践すること、そして継続することを通して、児童の基礎学力を向上させることができるかどうかを検証する研究を行うこととした。</p>
II 研究の方法	<p>本研究においては以下の 3 点について行った。</p> <p><u>1 先行研究の調査</u></p> <p>授業形態の種類、教科指導における ICT 活用の方法について、先行研究を調査した。</p> <p><u>2 A 小学校への調査</u></p> <p>平成 24 年 8 月に ICT 活用を継続している学校の教員 15 名に対して行ったアンケート調査について記載した。「実物投影機やフラッシュ型教材が活用しないとする、活用した時と比べてどのような点で困るか」について 6 場面を提示し、自由記述で回答を得た。</p> <p><u>3 授業実践</u></p> <p>プレテストを基に成績上位及び下位のグループに分け、平成 24 年 9 月に 10 時間の授業実践を行った。授業実践は、教室環境として実物投影機とプロジェ</p>

	<p>クタ、マグネット型スクリーンを教室に常設し、ICTが必要な授業場面において準備に時間をかけずにICT活用ができるようにしたその後、ポストテストを実施し、プレテストとの比較を行った。</p>
<p>III 研究の結果</p>	<p><u>1 先行研究の調査</u></p> <p>ICT活用を効果的に実施していくためには、普通教室の中で誰もが簡単に使えるようなものであること。教員は、「実物投影機を使って大きく映すこと」が最も効果的と考えていることが認められた。</p> <p><u>2 A小学校への調査</u></p> <p>実物投影機やフラッシュ型教材が活用できなくなったらどのような点で困るかについて調査した結果、教員が使う際も児童が使う際も時間の軽減に大きな役目を果たしていることが認められた。</p> <p><u>3 授業実践</u></p> <p>プレテストを基に成績上位及び下位のグループに分け、授業実践を行った。その後、ポストテストを実施して単元実施前よりも多くの児童が到達率を上げることができたことを確かめた。プレテストとの比較をし、到達率が上昇した要因の一つとしてICT活用を継続して行ったことが認められた。その後に行った把持テストにおいても習得した内容が定着していることが認められた。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>本研究における実践を通し、ICT活用を継続して取り組む学校の教員が、実物投影機が使えない環境になったら、活用しなかったときよりも作業などに時間をかけることがなくなり、その分習得をさせる時間に活用することができるようになったことが明らかになった。</p> <p>授業実践の前後で行ったプレテストとポストテストの結果から、ICT活用を全く行って来なかった学級において活用を継続させていくと、教科書で扱われている知識の定着を図るためには有効な手段の一つだということが明らかになった。また、把持テストの結果を通して、習得した内容を維持し続けていくためには、繰り返しドリルやフラッシュ型教材などを活用して復習の習慣が必要であることが明らかになった。</p> <p>また、ICTを活用した授業展開を作成するにあたり、効果的なICT活用とするために学習指導案に「ICTの活用」項目を設けたことや、板書計画だけでなくノート計画とスクリーン投影計画をたて、ノートの書き方についても事前に想定した。ICTを活用した学習指導案を作成することと同時に、学習規律の徹底を図ったり、児童に提示するものを順番とともに考えたりするなど、ICT活用以外の面からも入念に考えて授業を設計することができた。授業設計には、入念な想定を考えることと、分かりやすい規律を児童に示しているかがよりよい授業につながるということを、自分の中に意識付けることができた。</p> <p>今後は長い期間で継続的に取り組むことで、本研究が確かなものになることが分かった。</p>